

古典籍無償貸出プロジェクト 「和本バンク」のすすめ

加藤三枝（名古屋市立大学）

同志社大学古典教材開発研究センター（以下「センター」）では、有志から明治時代以前の和本（日本の伝統的な装訂で作られた書物）を募り、寄贈された書物を、授業での使用を検討している小学校・中学校・高等学校・高等専門学校の教員へ無償で貸し出す「和本バンク」のプロジェクトを、二〇二一年十一月より試行的に開始しました。ここでは、取り組みの背景・経緯、利用方法等について紹介します。

1 「和本バンク」開始の背景と目的

「和本バンク」の取り組みは、二〇二一年度日本近世文学会春季大会のシンポジウムにおいて、山田和人センター長の「古典教育に学会は何ができるか」という発表で、呼びかけを行ったことを契機として始まりました。

センター長の「子どもが古典籍に触れる経験は教育的効果が高く、雑本・端本でもその効果は薄まらない。教育現場で活用できる和本をご提供いただきたい。」という呼びかけに、賛同者からセンターへの和本の寄贈が続き、現在までに百点以上の和本が集まっています。当初は「雑端バンク」と命名し、蔵書整理を行っていました。が、作業が一段落し実際に試行的に運用を開始するにあたり、名称をより一般的な「和本バンク」と変更しました。

寄贈書の内容は、教科書に載っている古典文学、漫画の元祖とも呼ばれる草双紙、江戸の古地図、昔の子どもが実際に遊んだ双六、明治の教科書など、学術的なものから遊戯的なものまで多岐にわたります。寄贈された和本の内容からも分かるように、教科書に載っている文学作品は、古典と呼ばれるもののごく一部であり、古典と

は大海のごとく深くて広いものです。

「和本バンク」は、ガラスケース越しではなく、実際に和本を手に取り、めくってみたり、匂いを嗅いだり、意外な軽さや重さを実感したりすることで、一人でも多くの子どもに、和本を身近に感じてもらい、古典という過去の遺産をリアルに受け止める体験をもらうことを目的としています。

2 「和本バンク」を活用した授業実践例

二〇二二年三月には、名古屋大学教育学部附属中学校の協力を得て、新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を取った上で、「和本バンク」を活用した特別授業を、センター研究員でもある加藤直志さん（同校）に加え、外部講師として三宅宏幸さん（愛知県立大学）・筆者（名古屋市立大学）が中学三年生の国語の授業時間に実施しました。授業内容は、加藤直志さんによって実践3「実際の和本を利用した出前授業」に詳しくまとめられていますので、ここでは授業者として感じたことを簡単に報告したいと思います。

特別授業の当日は、古典に親しんでもらうこと、古典

への興味関心を高めることを目的に、グループごとに異なる和本を配付し、文字・挿絵・大きさ・重さ・紙という五つの観点から、現代の書物との相違点と共通点を考察してもらいました。また、くずし字で書かれている和本の内容についても書名や挿絵などをヒントにまとめてもらうことに。授業の後半にはグループごとの発表時間を設けましたが、生徒たちの鋭い考察に舌を巻きました。

同校ではくずし字資料を用いた特別授業を以前より実施していますが、本物の和本が持つ効用でしょうか、いずれのグループも例年より課題の考察が詳細でした。例えば、多色刷りの古典籍を観察したことで現代の染料との発色の違いに言及したり、和本の軽さや丈夫さから和紙の優位性に踏み込んだり、実際に手に取ったからこそ気付ける意見が次々と出され、外部講師の二人はオンラインでの参加であったにも関わらず、生徒たちの活気を対面時のように感じる事ができました。

対面時のように感じる事ができました。

3 「和本バンク」の利用方法

「和本バンク」の利用申込方法は、同志社大学古典教材開発研究センターのWEBサイトの「和本バンク」<https://kotekiri20.wixsite.com/cdecnjl> [図1]のページにある「問合せフォーム」からご利用希望である旨をご連絡いただだけです。申し込みを受けて、センター研究員が貸出可能リストをお送りします。ご利用者には、その和本リストのなかからご希望の和本をお選びいただきます。

持続可能な運営を目指していることから、現在よりも利用者が大幅に増加した場合には、送料を負担いただくことになるかもしれません。しかし、和本の貸出自体は無償とするなど、教育機関の負担は可能な限り抑える予定です。

先に述べた通り、「和本バンク」に所蔵される和本は、国語の教科書に掲載される『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『徒然草』『百人一首』といった著名な古典文学作品をはじめ、草双紙・地図・双六や浮世絵といった多分野にわたります。

本を出すと、本当に驚いた様子で、優しく手に取ってめくったり、匂いを嗅いでみたり、一部分に読み取れる文字を見つけて興奮したりしていました。(中学校教諭)

(3)初めて和本に触る生徒がほとんどであり、「読めない!」「案外読める!」「軽い!」など、様々な反応をしていました。三年生は竹取物語や徒然草の冒頭、また仁和寺にある法師などを昨年度学んでいたため、該当箇所を示してあげました。中にはその部分を読むために授業後に「もう一度見せてください」と来てくれる生徒もありました。(中高一貫校教諭)

4 古典教材の未来を切り拓く!!コテキリ

山田センター長は、自身のSNS(TwitterやFacebook等)で「和本は過去・現在・未来をつなぐタイムカプセルだが、そこに存在するだけなら文化遺産である。しかし、それが活用されると文化資源となる。」と発信してきました。センターでは、「古典教材の未来を切り拓く!」研究会(通称「コテキリの会」)を年二回

本書刊行時点ま

で、関東・東海・関西地区の複数の小学校・中学校・高等学校の先生方からご利用いただきましたが、事後アンケートでは次のような感想を頂戴しました。

(1)国語の仮名の由来で使用しました。子どもたち

は想像以上に興味深々でした。竹取物語はちょっと読めた!と喜んでいました。実際に本物に触れることでその時代にタイムスリップしたようでした。(小学校教諭)

(2)三代和歌集の授業にて利用しました。学びのあとに和

開催していますが、今後も和本(やそこに記されたくずし字)が文化遺産・文化資源であることを忘れず、その価値を教育の現場で問い直し続け、成果を研究会などで公開していきたいと思っています。

「和本バンク」などの活動を拡げるには、現場の教員の協力が欠かせません。現在センターでは、和本の専門知識を持ち合わせない授業者でも手軽に利用できるような教材を開発しており、「和本バンク」についても、より利用しやすいシステムに改善していきたいと思っています。また、教材データを共有し、相互利用できる教材データベースを構想中であり、本書の刊行をきっかけに、今後和本やくずし字を用いたモジュール教材を開発していきたいと思っています。

コテキリの会への参加者は回を重ねるごとに増加していますが、センターによる活動の認知度は高いとは言えません。しかし、着実にその輪は広がっています。今後も当センターでは、教員のみならず、学生や院生、研究者、司書、学芸員、出版社、一般の人々と一緒に、古典教材の未来を切り拓いていきたいと考えています。

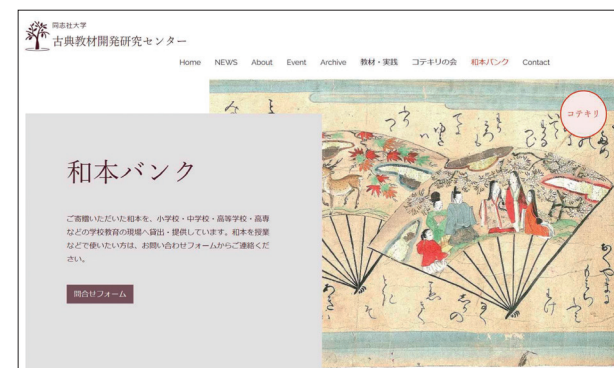


図1 「和本バンク」トップページ